
緋弾のARIA～誓いの一閃～

なげっと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のARIA〜誓いの一閃〜

【Nコード】

N0886X

【作者名】

なげつと

【あらすじ】

巻き込まれ体質の軌条梗稀。

武偵高で始まる新たな生活。

平穩に過ぎる訳もなく彼はトラブルに巻き込まれる毎日を送っている。

子供の頃の悪夢。誓った決意。

彼は仲間と共に突き進むのである・・・

これは緋弾のARIAの二次創作です。

装填1 出会い（前書き）

HETAKUSOですが

生暖かい目で見てください（^^;）

装填1 出会い

血に染まる部屋

人の死体の山

血の滴る刃

立ち尽くす少女

少女の目には生気が感じられずただ笑っているだけ、
惨劇の夜。

少年は恐怖に震え、その少女の言葉を聞く

「ア．．．ビ．．．ヨ．．．．．ッテ．．．フッフ」

「．．．．．！」

悪夢に魘され目が覚める。

時刻は7時56分。

バスには間に合わない。

「完全に遅刻じゃねえか．．．」

俺は武偵高行きのバスを諦め、自転車通学を決意する。

にしても．．．なんであの記憶が今更．．．

武器などを調べながらあの悪夢について考えていると、時刻は58分を回った。

「ヤベっ！！遅刻する！！」

あわてて自転車にまたがり、武偵高へと向かう。

この出来事を俺、軌条きじょう 梗稀けいひは

一生忘れる事はないだろう・・・

数分後、俺は自転車を漕ぎ、よくわからない状況を整理していた。
なんだ？この状況は？

なぜ俺がこんな変な二輪に銃口を向けられなきゃならんのだ？

向けられている銃はUZI。秒速10発の9パラをぶっ放す
イスラエルIMI社の傑作短機関銃である。
サブマシンガン

まあ・・・武偵高だからこんなイタズラは日常茶飯事だが・・・

「その チャリには 爆弾が 仕掛けて あり やがります」

なんか物騒な事言ってるし、異様にムカツクなこの声・・・

俺は一応片手で自転車を探ると、確かにあった。プラスチック爆弾。
しかも車だつて吹き飛ぶ量の爆弾が、今まさに俺の尻の下にあるの
だ。

携帯に手を伸ばそうとしたその時、

「助けを 求めては いけません 携帯を 使用した 場合も
爆発 し やがります」

マジでか！！

誰だこんな手の込んだイタズラしたやつは！！
見つけたらフルオートで射撃してやる！！

ん。
前にいるのは……

「よおキンジ。奇遇だな！お前もか！」

「梗輝か！？お前もまさか・・・！？つかの状況わかってんのか！？」

どうやらお前も同じ星のもとで生まれたみたいだな。そう。俺達は武偵殺しの模倣犯に世にも珍しいチャリジャックに遭っている。

「分かってるとも。だが・・・なあ？俺一人なら助からなくてもないが・・・お前も同時にとなるとなあ・・・」

「な！？ふざけんな！友達を見捨てるな！！」

キンジの叫びを無視し、ちよつと空を見る。
ん？女子寮の屋上に誰か居る。

「おいキンジ！あれ・・・」

遠目でもわかるピンクのツインテール。

ん？

キンジが見たその瞬間、少女は屋上から勢い良く飛び降りた！
何してんだ！あいつ！

パラシュートを開き、こちらに向かってくる……つてえええええ

！！！！

「うおー!!こっちくんな!!このチャリには爆弾が・・・」

「ほらその馬鹿共！！さっさと頭下げなさいよ！！」

え え え え え え え !!

何だコイツ!?なんて考えてる時にはもうセグウェイは

少女の放った水平撃ちで破壊されていた。

「あの不安定な体勢で・・・！」

キンジは驚きに目を見開いていた。

それもそのはず

少女はパラシュートからたった1人でUZIを積んだセグウェイを2機同時に破壊したのだから・・・

安心したのも束の間、まだこのチャリには爆弾が積んである事を思
い出す。

「おい！この自転車には爆弾が仕掛けられてる！！

一緒に吹き飛ばされたくなくすりやさつさと逃げ・・・ぐはあ！！！！」

顔を思いつき蹴られた。クソ痛え！！

「バカ！！武偵憲章1条！！」仲間を信じ 仲間を助けよ！！」

いくわよ！！」

と言ったが俺は、

「俺は大丈夫だ！！キンジだけを助けてくれ！！」

助かる方法は・・・ある！！

「じゃあなキンジ！！生きてたらまた会おうぜ！！」

俺はさらに加速し、少女の居る間逆の方向にハンドルを切る。

少女は、キンジを優先し助けるつもりになってくれたらしく、

逆さ吊状態になっている。

おそらくそのまま受け止める気なのだろう。

よかった・・・あんな方法じゃなくて・・・。

まあこっちのほう危険ではあるがな・・・

などと思いつつ、ビルの壁に

特性の『ワイヤー弾』を発射し

自転車のペダルを思いつき蹴ってワイヤーに手を伸ばした。

今まさに宙吊り状態である。

「キンジは平気だろうな・・・」

『武偵殺し』の模倣犯による犯行と見て間違いないだろう。手口がそっくりだし。

「つーか・・・自転車があ・・・」

最近買ったばかりの自転車が・・・

2万だぞこの野郎！！捕まえたなら綴に送って尋問地獄を・・・などと考えながら俺は歩き出すのだった。

武偵高、東京武偵高校とはレインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2km・東西500mの長方形をした人口島、通称『学園島』である。

その学園島の中にあるのが武偵の総合教育機関である。そもそも武偵とは凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格。

武装を許され、逮捕権を持つ用は便利屋。

ただ警察と違うのは『武偵は金で動く』ということだ。

武偵は武偵法が許す限りどんな事でもできる。

しかし、武偵が犯罪を犯すと通常の3倍の刑になる。これを『武偵3倍刑』という。

とんだ余談だった話に戻そう

俺がキンジを探し当てるのに時間は掛からなかった。

キンジは体育倉庫前で少女と取っ組み合っていた。

ていうかキンジは何もしてないな・・・

それになぜかヒステリアモードだし・・・

まさか！？あの娘に何かしたのか！？

・・・まさかな。

そうしてる時、キンジが突然こっちを向いた。

やべっバレたか！？

なんて思ったが違う。さっきの奴だ！！

「アリアー！危ない！！」

とっさに叫んだキンジだが、UZIはとくに迫ってきている。

アリアというらしい彼女はキョトンとしてる。

まずい！！キンジじゃ間に合わん！！

「しゃーねえなあ・・・」

俺はホルスターからDEを取り出し、即座に発砲した。

とっさの事だったので腕に痺れが残る。

やっぱ痛えや。居合い抜きは。

アリアが動くのはそう遅くなかった。

「こっこの、強猥男！！神妙に・・・わきやおー！！」

銃弾に気づかず転んだ。わきやおってなんだよ・・・ww

少し笑いを堪えつつ、

「キンジw早く逃げるぞー！！」

さっさと逃げることにした。

朝の空に大きなアニメ声が響き渡る

「この卑怯者！！でっかい風穴開けてやるんだからあー！！」

しかしこれはまだまだプロローグに過ぎない・・・

ともあれ

これが後に命を預ける仲間となる神崎・H・アリアとの出会いである。

第1弾 理子の暴走トーク

「キンジ！よかったなあ生きてて」

俺が机に突っ伏しているキンジに話を振るが・・・

こりゃ本格的にダメっばいな・・・

なんせヒステリアモードを見られちゃったからな。

ちなみにヒステリアモードとは正式にはヒステリア・サヴァン・シンドローム

一定以上の恋愛時脳内物質が分泌されるとそれが常人の30倍以上の量の神経伝達物質を媒介し大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。

しかしコイツは中学時代のトラウマもありこのモードになりたがらない。

まあその話はおいおいするとして・・・

「よおキンジ、梗稀！同じクラスか！！」

この話しかけてきたバカは車輜^{ロシ}科の武藤剛気。

「やあ。おはよう」

コイツは強襲^{アサルト}科の不知火亮。

「おはよう・・・てか武藤！朝からうつせえ！！」

等とギャーギャー言い合っているうちにHRの時間である。

早速事件は起きた。

「先生、私あいつらの真ん中に座りたい」
神崎・H・アリアはそう宣言した。

・・・なんで俺まで？

俺は何もしてないぞ。助けた以外は。

まあキンジよりマシか・・・

バレないように頭抱えて震えてるしな。

つかバレバレだ。

「なんでよりによつて・・・！」

「キンジ。何したかは知らんが覚悟を決めろ。」

「何もしてない！誤解だ！！」

「よ、よかったなキンジ、梗稀、なんか知らんがお前らにも春がきたみたいだぞ。先生、俺、席かわりますよ」

武藤てめえ！！友達を売りやがった！！今度から絶対奢ってやんねえからな！！

アリアがキンジへ近づいていく。

「キンジ、これ、さっきのベルト」

ぽいつと投げられ、それをキンジがキャッチした。

「梗稀。あんたも」

ゴトつと青龍が彫られたM93Fが置かれる。
落としちまってたのか・・・どうりで無い筈だ。

てかなんで名前知ってたんだ？名乗ってないのに・・・
数々の疑問が浮かぶ中、一人の女子が立ち上がり・・・

「理子分かった！ 分かっちゃった！ これフラグばつきばつきに
立ってるよ」

キンジの隣の席の峰理子が大きく挙手し、

「キー君ベルトしてない！

そして、ベルトをツインテールさんが持ってた！ これ謎でしょ
！ 謎でしょ！

でも理子には推理で来た！ できちゃった！

あれ？ コー君の銃は何か？ 何か？ あ！分かっちゃった！」

この急に爆弾トークと繰り広げたのは峰理子。
インケスタ

探偵科NO.1のバカだがランクはA。

制服はゴスロリ風？だっけかに改造されてる。

キー君は彼女の前でベルトを取る何らかの行為をした！

そして、彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ でも、彼女はコー君
の彼女で！

嫉妬したコー君は銃を持って乱入した！そんなでもって
つまり、3人は彼女を挟んで恋愛の真っ最中なんだよ！！！！」

待て待て！！なんでそうなる！！そんなアホの推理を誰が・・・

「き、キンジと梗稀がこんな可愛い子といつのまに！！」「影の薄
い奴らだと思ってたのに」

「不潔だわ！！不純だわ！！」

あゝあやっちまった・・・

このバカ共め・・・真に受けやがって！！

俺とキンジが諦めた瞬間

ズキユンズキユン

2発の銃声で皆が黙った。

顔を真っ赤にしたアリアが銃を撃ったのだ。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

あつれゝ？恋愛より否定するところあるでしょうよゝ

全員が顔を真っ青にし、元凶の理子はゆっくりと席に着いた。

ちなみに、銃は必要以上に発砲しないとルールがあるが、必要以上にと書いてある。つまり、してもいいのだ。

まあこゝんな過激な自己紹介は過去にも、そしてこれからもないだろう。

「全員覚えておきなさい！ そんな馬鹿なこと言う奴には・・・」

後に散々聞かされる事となる言葉を言い放つ

「風穴開けるわよ！！」

第2弾 奴隷

朝の自己紹介から数時間、
現在は昼休みである。

バカのクラスメイトの事だから、
どうせ質問攻めに遭うだろう。

そう思って銃の弾倉には『ワイヤー弾』を装填しておいた。

俺は窓から飛び出て、ワイヤー弾を校舎に撃ち、
さっさと避難した。

よし。これで安心してメシが食える
キンジには悪いが困になってもらおう。

俺は持参してきたコンビニ弁当を食い、携帯を確認する。

携帯には今朝の事件の内容が書かれていた。

恐らく諜報科レザドと情報科インフォルマが調べたのだろう。

お早いこつて。

するとメールがきた。

装備科アムトの平賀さんからだ。

内容は「注文の品できたのだ〜！

5時間目の実習の時間に来るといいのだ〜！」

とのこと

注文の品というのはいわゆる俺専用の武器だ。

まあ色々使うからあまり出番はないと思うが・・・

ちなみに『実習』とは

武偵高は午前中、一般教科ノルマルレと呼ばれる通常の高校同様の授業だが5時間目からは武偵専用の授業がある。

たとえば強襲科なら射撃訓練、車輛科なら操縦訓練といった感じだ。俺は強襲科だが既に単位は足りているので、1日ぐらいサボタージユしても問題ない。

ついでに言つとくと、武偵は単位を依頼クエストで稼がなければ留年してしまうので必死になって稼ぐ奴もいるとか。

というわけで装備科棟。

俺はひらがあやと書かれたドアの前にいる。

インターホンを鳴らすと、

小柄な武偵が出てきた。

「あやや？ 梗稀君。お待ちしてましたなのだしささっ！ あがつてあがつてなのだ」

というのでお言葉に甘えさせてもらい部屋へ相変わらずごちゃごちゃした部屋だな。

「で？ 注文の品が出来たんだろ？」

俺が聞くと

「もちろんなのだ！！ あややの仕事に抜かりはないのだ！！」

と言って机の中に頭を突っ込んで探している。

どこに何があるかよく分かるなあ・・・

まあ天才だからなこの人は、

「あつたのだ！これなのだ！！」

じゃーん！！と言って見せてくれたのは
折りたたみ式の槍である。

開いてみると刀身には紅蓮の朱雀が彫つてある。

おお！！注文どおりだな！！

にしても・・・本当にすごいなこれは・・・

「確かに。で、料金は？」

平賀さんは

「梗稀君はお得意様だから特別に20万でどうなのだ？」

うん。この品ならその料金でも文句はない。
もつと値が張ると思つたがその値段なら。

「よし！それじゃ確かに。」

俺は面倒だったので小切手で渡した。

「ありがとうございますただ」

俺は装備科棟から出て自室に向かったがとんでもない事になってい
た。

家具は壊れ、壁には風穴が出来ている始末。

聞けば、どっちがテレビを見るかで揉めていたらしい。

仕方ないので強襲科の奴らをほっというてキンジの部屋に行くことにした。

修理できるまでの仮住まいだ。

キンジは3コール目が出た。

「キンジか？ちよっとうちのバカルームメイトが家具やら壊しちゃったから

しばらく泊めてくんねえか？」

キンジは

「わかった。じゃあ来いよ。」

キンジの了承も得たので、探偵科の寮へ向かう事にした。

今日車輛科で購入したホーネット250を発車させる。

そのせいで金も減ったけどな。

でも歩くよりはマシだしな。

「よおキンジ。おじゃまするぜ。」

「ああ梗稀か？あがれよ」

一応おじゃましますとは言ったが、この部屋にはキンジしかない。探偵科に転科した時、たまたまルームメイトになる生徒が居なかったため

1人で住んでるらしい。

この広い部屋全部を1人でとは羨ましいな・・・
風呂もテレビも独占できるって、うちじゃ考えられねえな。

「そっぴえばキンジは強襲科に戻らねえのか？」

先輩からも一目置かれてゐるのに。

ちなみに俺達は入試の時に試験官をぶちのめし、

Sランクつー格付けを貰っていた。

まあ今は色々あつてBランクだけだな。

「言つたろ？俺は4月には武偵の世界から足を洗つて」

残念だな。お前と一緒に薬莢拾いやらされて

ウサ晴らしに行ったクエストで連続殺人犯捕まえたのが懐かしいぜ・

・

なんて適当にだらけていると

ピンポーン

インターホンが鳴った。

キンジを見たが無反応。

このインターホンは白雪じゃないな。

ピンポーン

再び鳴るインターホン

相変わらずの無反応。

居留守でも使う気か？

ピンポンピンポンピンポン

連打したぞ！怖え！！

キンジは立ち上がり、

「ああ、もう、うるせえなあ！！」

さすがに我慢できなかったのかドアへ向かう。
俺も後ろに着いていった。

「誰だよ！？」

キンジがそういうと、ドアの前には

トランプ柄のトランクを持った、神崎・H・アリアがいた！！

「遅い！！私がチャイム鳴らしたら3秒以内に出ること！！」

いきなりやってきて、カメラア赤紫色の瞳を吊り上げ

トランプ柄のトランクを持った、神崎・H・アリアがいた！！

「「神崎！？」「」

アリアは当然のように

「アリアでいいわよ」

と答えた。なんだ？なんなんだこの状況は！？

ずかずかと踏み込んでくるアリアと目が合う。

「梗稀も居るの？好都合ね・・・」
と呟いた。

好都合？なんのこつちゃ・・・

その疑問が解決されるのは遅くなかった

アリアはトランクの中に入れておきなさいと命令すると窓の前まで寄ってこう宣言した。

「キンジ、梗稀、あんた等私の奴隷になりなさい！！」

いきなりの奴隷宣言。

この言葉が、2人の人生と生活を大きく変えて行くのである。

G o F o r T h e N e x t ! ! !

第2弾 奴隷（後書き）

軌条 梗稀

武器：槍（朱雀の彫られた 銃（青龍の彫られた

デザートイーグル1丁

?????

性格：フレンドリー

キンジと同じ2年正。キンジとは中学からの友人で、よく一緒に居る。全体的にオールマイティな戦闘スタイルで一部では2つ名がある。

特に近接に特化していて中距離、近距離ならHSSにも引けを取らない実力者。

過去に一族の10分の4を殺された事がある。

切り札を3枚隠し持っている。

BランクとされているがSランクとの噂もある。

容姿は女性のような綺麗な顔立ちのため

子供の頃は女と間違えられていた。

それがコンプレックスでもある。

極度の巻き込まれ体質である。

キンジの様な特殊体質を持っている。

第3弾 白虎の武器

「は？」

俺はいきなりの奴隷宣言に
頭が真つ白になった。

当然、キンジも同様に。

「奴隷になりなさい」だと？
何が言いたいんだ？コイツ？

「ほら！さつさと飲み物ぐらい出しなさいよ！
無礼な奴ね！」

人の家上がりこんで飲み物の催促の方が無礼だろ…
アリアはそのままソファーに座り、話を続ける。

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ！
砂糖はカンナ！1分以内！」

恐らくコーヒーの種類なのだろうが、
俺にはさっぱりだ。

キンジにまばたき信号で

こいつ簡単に引き下がらねえぞ。と送ると
そうみたいだなと帰ってきた。

とりあえず待たせすぎると発砲しかねないので、
キンジがインスタントコーヒーをアリアに出す。

コーヒーに鼻を近づけ、匂いを嗅いで不思議そうな顔で

「これ本当にコーヒー？」

「それしかないんだから有難く飲めよ。」

アリアはコーヒーを一口飲んでから、

「変な味…ギリシャコーヒーに似てるけどちょっと違う」と呟いた。

コイツ、インスタントコーヒーを知らないのか？
そんなことを思いつつ、視線をアリアに戻す

「つーか何でまた家に押しかけて来たんだよ。」

キンジがアリアに質問をする。

アリアはキンジに向かって、

「わからないの？」

「わかるか!!」

まあその意見には同意だが、
俺には分かったぞ。

今朝の件と照らし合わせればな・・・

一部始終しか見てないが、キンジがアリアに何かした
ってというのは明確だろう。

「梗概は？」

アリアは俺に話を振る。

「さあな。ていうか何で俺の名前知ってたんだよ？」

と今まで言えなかった事を言う。

「武偵なら自分で調べなさい。」

とキツイ一言を貰った。

まあ、多分調べたんだろうな。

「まあいいわ。」

「おなかすいた。」

・・・は？

急に何を言い出すんだコイツは・・・
ていうか話題が180°変わったな。

「この辺に松本屋のももまん売ってる所無い？私食べたいな」

いやいや…ありえないだろこれは

「じゃっコンビニ行くか」

俺が提案すると、

「コンビニ？ああ、あの小さいスーパーの事ね。
じゃあ行きましょ」

なんでお前が仕切る。まあいいけど

「じゃあってなんだよ」

「バカね食べ物買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ」

という訳で、じゃんけんして負けたキンジに
弁当のおつかい（パシリ）を頼んで、

俺は今、キンジの寮の個室に居る
ようは

俺の仮部屋だ。

ピンポーン

チャイムが鳴る。

今日は客が多いな。まあ1人はほぼ不法侵入だが

届いたのは俺宛の荷物だった。

差出人は不明。ただ、俺の実家の住所だった。

「なんだこれ？」

届いたのは剣だ。

しかも相当な業物の

刀身には白虎が彫られており、

刀身は鋭く、白銀に光っている。

手紙が同封されていたので読んでみた。

「この日本刀は梗稀様の為に作られた物です。

名を『煌白虎』といいます。

この様な形でお渡しする事になってしまいました。が、

何卒、ご了承ください。

敬具 海蓮」

と書かれていた。

海蓮からか…懐かしいな…

ブルルルル
電話が鳴る。

「誰からだ？」

電話に出ると、

「梗稀様ですか？海蓮です。

お荷物、お届けになったでしょうか？」

！！！！！！

「かつ海蓮！？なんで俺の番号知ってんだ！？」

俺が聞くと、すぐに答えてくれた。

「はい。少しばかり梗稀様の事を調べさせて頂きました。

ちなみにその煌白虎は梗稀様の誕生日プレゼントなんです。」

誕生日？ああ、そういえば今日だったっけか

「ああ…ありがとう。

ところで母さんは元気か？」

「はい。お母様はとても元気です。

しかし…」

海蓮の言葉が濁ったので、

「どうかしたのか？」

と聞き返す。

「架仔様の容態が悪くここ暫く寝込んでいます。」

・・・！架仔が…！？

俺が絶句していると気を使ったのか海蓮は

「大丈夫です。しばらく安静にしていれば治ると
蕎麦も言っておられました…」

「ああ、ありがとな…それじゃあまた連絡するよ…」

「はい。お休みなさいませ梗稀様。それでは」
電話が切れた。

まさか海連から電話が来るとはな。

すこし驚いたが、架仔のことは蕎麦に任せれば平気だろうしな…

そんなことを考え俺はキンジが帰って来るのを待つのであった…

第3弾 白虎の武器（後書き）

色々名前が出てきましたが、
後々登場させるつもりです。

第4弾 とばっちり

俺が部屋に戻るとキンジが帰ってきた。

並べられた弁当を見て、俺は焼肉弁当にする。
というか・・・あの謎の食い物はなんだろう？

そつえばさつき...

『アリア、ももまんつての無いんだけど・・・』

『はあ？だったらほかの所に買いに行きなさい！無かったら風穴！
』！』

という理不尽極まりない会話を聞いた気がする。
『ももまん』・・・だったか？

テーブルに着き、弁当を食い始める。

「・・・。」

「・・・。」

おい！何か喋ってくれ！！気まず過ぎる！！！！

「梗稀」

アリアが俺に話しかけてきた。

「なんだよ」

と俺。

「さつきの電話、何だったのよ？あとその白い刀は何？」

ゲッ・・・聞こえてたのかよ

隠す事でもないし、ここは素直に、

「ああ・・・実家からの電話だよ。この刀は誕生日プレゼントだそうだ。」

「実家？ていうかアンタ誕生日なんだ。」

ああ・・・人生最悪のな・・・

「ふん。」

そう言つとアリアはもまんを食い始めた。

・・・おいおい冗談だろ！？

コイツ1分間の内にもまん7個も食いやがった！！

どこにそんな・・・

などと思いつつながら弁当を食う。

するとキンジが

「・・・ていうかな、奴隷ってなんだよ」

キンジが本題を切り出した。

アリアが9個目のもまんを食いながら

「強襲科であたしのパーティに入りなさい。」

一緒に武偵活動するの」

「何言つてんだ。俺は強襲科が嫌で探偵科に転科したんだ。

それに、俺は4月には一般校に転校するんだ。

武偵自体やめるつもりだ。

よりによつてあんなトチ狂った所に戻るなんて無理だ。」

キンジはそう言うが、

「俺はいいぜ」

面白そうだし、アリアと武偵活動するのも悪くない。

「へえ・・・あなたは物分りが良いわね・・・」

アリアが感心したように俺を見ると

「ついでに言つとくわ。私は嫌いな言葉が3つあるわ」
おお、キンジの話はスルーか。

「『無理』『疲れた』『めんどくさい』

この3つは人間の持つ無限の可能性を押し留める良くない言葉。
あたしの前では2度と使わないこと」

アリアは最後のももまんを食べながら

「2人はそうね・・・あたしと同じフロントがいいわ」

フロント。まあ俺はもともフロントだし構わないな。
でも怪我や死傷率はかなり高い。

キンジはアリアに向かって

「よくない！！そもそも何で俺達なんだ！！」
アリアに向かってそう言うが

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」
話題が急に飛んだなあ。

「キンジは質問ばっかの子供みたい。
仮にも武偵なら自分で推理しなさい。」

「つまりは何かあるんだろ？」

彼女はおそらく、何らかの強大な敵と戦おうとしてる。
だからキンジの様な強い奴が仲間に欲しいのだろう。

『奴隷』というのはこの娘なりの『仲間』なのかも・・・

「それよりも俺はBランクだ。」

良いとは言ったが俺はそこまで強くない。
キンジと違ってな」

「『完全武人』 確かあんたの2つ名よね？」

そこまで知っているのか・・・
俺の地域限定の2つ名。

「あんたは十分強いでしょ？
でもあんたは切り札を隠してる。 違う？」

うっ・・・そう言われればその通りだ。

「しっかりと調べさせてもらったわ。 あんたについてはね・・・」

ん？俺については？てことはキンジの事はよく分かってないのかも・・・

でもHSSに感づいていない様だし黙っておこう。
だが俺についてはたいてい分かっているだろう。
こりゃ、完全に槍技は解禁したほうがいいかもな・・・

「とにかく！」

お！珍しくキンジが強気だな

「帰ってくれ！」

「まあその内ね」

「そのうちっていつだよー！」

「何が何でも入ってもらおうわ！うんって言わないなら・・・」

「言わねーよ。どうするつもりだ？」

「泊まってく！！」

プツ・・・こいつは本当に面白い奴だ。

やっぱ、正解だ。

情報収集能力が高いし、なにより強い。

案外、組むのも悪くないな。

まあツンデレ体質なのは玉に瑕だけだな。

「ちょっと待て！何言ってるんだ！うえ・・・」

おいキンジ。ハンバーグがリバーズしかけたぞ・・・

「うるさい！泊まってくつたら泊まってく！

長期戦になる事も想定済み！」

アリアが指差したのは持ってきたトランク。

お泊りセットだったのか。

てかキンジはやばいんじゃないか？

ヒステリア的な意味で

「でてけ！！」

これはキンジじゃなく、アリアだ。

あれ？ここはキンジの部屋のはずじゃ・・・？

アリアは両手を挙げ

「分からず屋にはお仕置きよ！
外で頭を冷やしてきなさい！！」

アリアに追い出されたキンジを眺めていると、

「あんたもさつさと行きなさい！！」

え？俺は何もしてないのに・・・

そんな事を思いながら、俺はキンジの後を追いかけるのだった・・・

第5弾 ヤンデレ強襲

どうしてこうなった。

そう思いながら、俺達は寮下のコンビニで立ち読みしていた。

「なあキンジ。あそこってお前の部屋だよな？」

「ああ・・・そのはずだが・・・」

俺達はアリアから「頭を冷やせ!!」と追い出された。

・・・なんで俺まで!?

俺なんか悪い事しましたか？

「そろそろ大丈夫か？」

立ち読みし、時間を潰したあと、キンジがそう言ったので、コーラを買って部屋に戻る。

おかしい・・・廊下の電気は消されており、リビングの電気も消してある。

「帰った・・・のか？」

キンジが安心した様な表情になったその時、

ちゃばん

風呂場から音がした。ああなるほど。風呂ね・・・

ん? 『風呂』?

まてまてまて！！！！やばい！やばすぎる！！

恐らくアリアは自分が入浴するために俺達を追い出したのだろう。

しかし！その途中俺達が帰っているのが見つかったら・・・！

風穴を開けられるだろう・・・

俺はとつさに瞬き信号で

ウインキング

アリア 風呂 風穴 開く 静かに

と送った。

それを理解したのかキンジはドアを静かに閉めた。

まずはバレないように武器をボツシユートしようとしたその時！！

・・・ピン、ポーン・・・

さっ最悪だ！！こんな時にあいつが来るなんて・・・！

(白雪・・・！！)

ちなみに白雪とは

ほこけしらゆき

本名 星伽白雪

星伽神社の武装巫女の一人だ。

キンジとは幼なじみで、キンジのことが大好きなのだ。

世話焼きで、美人なのだが、

ヤンデレが入っているのだ。

俺は焦ってキンジに手招きしたが、

ゴンッ

ばかあああああ！！！！！！！！！！

キンジがてんぱって転びやがった！！

「だっ大丈夫？キンちゃん？」

はぁ・・・

もう居留守は使えない。

これは諦めよう。

ガチャ

ドアを開けるとやはり巫女装束の白雪がいた。

「あ、梗稀君。こんばんは」

「こんばんは・・・」

俺は悟られないよう、動揺を隠して言葉を返す。

やばいぞこれは！！

もしアリアがタオル1枚で風呂場から出てきてそれを白雪に見られたら・・・

考えたくもない。

てか見つかんなくてもヤバイな。

「な、なんだよその格好・・・」

キンジい！！動揺が隠しきれてませんよ！！

そしてバスルームを見るなよ！バレるだろ！！

「あっ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・
キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、

着替えないで来ちゃったんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよ？」

「いやいいから」

白雪はキンジには従順だからな。

キンジの言う事は何でも聞くと思う。
妥当な判断だ。

「ねえ、今朝の自転車爆破事件つてもしかして・・・」

「ああ、俺達だよ」

白雪がすげえ飛び上がったぞ・・・今。

「だっ大丈夫？怪我とかなかった？」

「大丈夫だから触んな」

「は、はい でも良かった無事で。

それにしても許せない・・・！キンちゃんを狙うなんて・・・

私、絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない・・・逮捕するよお！！」

怖ええええ！！！！なんかヤバイ事言ってなかったか！？今！！
絶対敵にまわしたくない奴No.1だな・・・

「こんなのは武偵にとって日常茶飯事だろ？この話は終わり！！」
キンジがそう言う

「は、はい・・・えっと・・・はい」

本当にキンジの言う事のは従順だな・・・白雪は
アリアとは正反対だな。

「でも、今日のキンちゃん達少し変だよ？」
「まずい！気づかれたか！？」

「へ、変？そんな事ないだろ！！」

落ち着けキンジ！声が裏返ってる！！

「なんかいつもより冷たい気が・・・」

「白雪！すまん、今俺達銃の整備してて・・・
早くしないと銃が大変な事になるから・・・！」

俺の言い訳が通じたのか
白雪は納得してくれた。
よし。まずは平気かな・・・

「じゃあ、これ」

白雪が持っていた包みを渡してくる

「筍ご飯作ったの。私、明日から恐山に合宿でキンちゃんの
ご飯作ってあげられないから・・・」

「ああ、ありがとう。よし用事は済んだ
さあ帰ろうな。な？な？な？」

キンジ・・・不自然すぎ＼（＾０＾）ノオワタ

「い、一日に2食も作っちゃうなんて、
な、なんか私お嫁さんみたいだね・・・って何言ってるんだろ私。

あは、あはは変だね……。うん。キンちゃんはどう思うっ。」

「分かったからお引き取り下さい白雪さん」

「わ……。分かったって……。それはつまりキンちゃんのお嫁……」

「ちゃぼん」

「!!!!」

「やばいアリアが出てくる!!」

「?中に誰か居るの?」

「やばい!これはマズイ!!」

「中に誰も居ませんよ」

「なぜ敬語になるんだ!!怪しすぎる!!」

「ねえ……。2人とも……。私に何か隠してる事ない?」

「「ないない!!」」

「これは絶対バレる!!ヤンデレオーラが……!」

「そう……。よかった」

「よ、よかった……。帰ってくれたか……」

「なんか帰り際に不快なオーラが見えた気がするが気のせいだろう。」

俺達は風呂場に走る。

前門の虎の次は後門の狼だ!!

今度こそ武器をボツシユートしなければ・・・

俺達が日本刀と銃に手を掛けた瞬間
風呂場のドアが開いた。

クチナシの匂いがしているアリアと
真っ青になった俺達の時が止まる。

「へ、変態!!」

さっと胸と腹の下を両手で隠した。

まずい! 弁解しないと!!

キンジと俺が弁解しようと手を挙げると
キンジの手にした鞆にパンツが、
俺が持ち上げた銃にはブラが、
トランプのマークがプリントされた子供っぽい・・・

「し、死ね!!!!!!!!」

キンジが顔面を強打されたのを見て、俺は窓から逃げようと試みるが

「逃がさないわよ!! この変態!!!!」

俺が飛び降りようとした瞬間

アリアが俺の腹にフック、そして首にラリアットを食らった。
そのまま東京湾に転落した。

俺はそのまま気絶した・・・

ああ最悪の誕生日だ・・・

第6弾 強襲科の模擬戦VSアリア

「バカキンジ！！ほら起きる！！」

朝から大声をだしてアリアがキンジの腹にグーパンチを叩き込む。

「ったく・・・朝から騒々しいな・・・」

俺は珍しく早起きし、朝飯を食っていると

キンジがアリアの攻撃を避けながらリビングに出てきた。

「おう梗稀。おはよう」

「おはよう・・・朝からうるさいぞ」

俺が文句を垂れながら朝飯を食っていると

「うまい事言っただけで逃げるつもりね！！」

アリアが仁王立ちしてキンジの腕に掴み掛かった。

「離せ！このっ！」

キンジは腕を掴まれ、更には腕を噛まれている。

「嫌だ！離すもんか！キンジ達は私の奴隷だ！！」

俺がその光景を眺めているとアリアが

「あ、梗稀！それ私にもよこしなさい」

俺の朝飯を指して言ってくる。

「ほらよ。」

俺は買ってきた焼きそばパンをアリアに投げる。
それを食い始める。

そしてキンジが

「それより梗稀！58分のバスに遅れるぞ！！」
もうそんな時間か！

俺はキンジと寮を出た。・・・キンジがアリアを引き摺る形で、

俺達は何とかバスに乗り、学校へ向かった。
一般授業が終わり、強襲科の授業なのだが・・・

「おーし。今日は模擬戦してもらうで」

『そうだ。京都に行こう』的なノリで言ったのは
強襲科の不良教師、蘭豹^{らんひょう}だ。

なんでも、マフィアの愛娘らしい。

「それじゃ・・・神崎と軌条！模擬戦やれや」
ゲッ・・・よりによってアリアとかよ！！
でも断ったら発砲されるから断れない・・・

「梗稀。ここでアンタの本気を見せなさい。」

アリアは戦るき満々だし、やるしかないな。

俺は目を閉じ、数秒黙り込む。

・・・長い瞬きを終え、目を開ける。

『鳳凰モード』

このモードは自身の全ての能力を一気に底上げする能力だ。

俺の使う『朱雀』の力を最大限に引き出す事が出来るのだ。

「それじゃあ・・・始め！！」

蘭豹がグロックを発砲すると同時にアリアが三点バーストで射撃してくる。

俺はそれを朱雀槍で弾きつつ、アリアに突撃する。

朱雀槍を収納し、白虎刀を取り出す。

・・・出し惜しみは無しだ！！

「白虎流 白薙^{はくなぎ}！！」

この前修行中に編み出した技を繰り出す。

この技は、空気に刀の粒子を乗せ、分子レベルの細かい斬撃を放つ技。

それをアリアは難なく避ける。やはり強い。

「梗稀！やるじゃない！でもこっちの番よ！！」

アリアは小太刀を2つ抜き、突撃してくる。

それを俺は白虎刀で受け止める。

「梗稀。正直あんたを過少評価してたわ。Sランクにも劣らない実力ね！！」

「そりやどうも！」

俺はアリアの小太刀を弾き、朱雀槍を取り出す。

距離を取り、アリアが距離を詰めた瞬間

「甘いぜ！必槍 朱雀炎舞^{すざくえんぶ}！！」

カウンターの突きを入れる。アリアはそれに耐え切れず吹き飛ばすが、^{ガバメント}だがすばやく受身を取り、拳銃を取り出し、接近してくる。

拳銃近接戦《アルカ》か・・・受けて立つぜ！

鳳凰モードの俺はすばやく青龍の銃を取り出し、
即座に発砲する。

「甘いわ！」

銃弾が弾き返される。

まずい！ここでは距離が近すぎる！

・・・仕方ない。使いたくなかったが奥の手だ・・・
アリアが小太刀を振るった瞬間、俺は消える。

「！」

会場が驚きにざわめいている。

「ここだよ！」

俺は天井から声をかける

「あっあんた今何したのよ！？」

「簡単な話さ。飛んだんだよ」

そう。鳳凰モードの跳躍力はすさまじい。
まるで、飛び立つ鳳凰の様に飛べるのだ。

「面白いわ・・・ますます気に入った！」

そう言うときアリアは俺に向かって発砲する。

俺はそれを避け続ける

さっきの拳銃近接戦で残弾はもうない。

これじゃあ埒が明かないな・・・

しょうがない・・・

俺がDEを取り出した瞬間

「そこまで!!」

蘭豹の静止がかかった。タイムオーバーだ。

授業が終わるとアリアが

「梗稀。あんたやるじゃない!少し見直したわ」

とりあえずアリアが満足してるからいいか・・・

ま、8割鳳凰モードのおかげだけだな

そうして俺達は帰路に着くのだった。

第6弾 強襲科の模擬戦〜VSアリア〜（後書き）

軌条 梗稀

『鳳凰モード』

全ての能力を底上げする

特別な能力。

梗稀の使う朱雀槍の能力が一番上がる。

そのほかにあと3つの能力がある。

朱雀炎舞

敵を一掃するのに長けている技だがカウンターにも使える。

鳳凰モードでのみ使える大技。

第7弾 ネット怪盗理子

授業が終わり、俺とキンジは女子寮前の温室で理子を待っていた。

「そつえば今日強襲科で模擬戦やったんだって？どうだった」

「まあ惜しいとこまで行っただけどタイムオーバーだった。」

「やっぱり鳳凰モード使ったのか・・・」

キンジは俺の体質を知っている。

まあ俺もヒステリアモードの事知ってるからおあいこだけど。

「キンジはアリアと組まないのか？」

「ああ。俺は絶対な・・・」

チツ強情な奴め・・・

まあそれなら俺にも考えがあるぞ・・・

授業後、アリアと作戦を考えたんだからな。

第1の作戦はキンジに1度きり組んでもらい、流れでそのまま組む。
第2の作戦はアリアが蜂蜜色ハニートラップの罠を仕掛け、ヒステリアモードにする。

まあ後者は俺の独断で考えたけどな。

言ったら多分殺される・・・いや、間違いなく・・・

「そついや今日は何してたんだ？」

「猫探し」

0・1単位の簡単な依頼クエストらしかった。

「1日アリアから開放されてよかったな」
俺が嫌味っぽく言っていると同時に

「キーくん！コーくん！！」

右手をぶんぶん振って理子がやってきた。
どうでもいいが遅刻だぞ。

「理子」

「おっす」

コイツ風呂入ってきてやがる。シャンプーの匂いにする。
そういえばコイツ、相変わらずの美少女だな・・・
性格は残念だけど。

アリアのちっこ可愛さと白雪のプロポーションを重ねたような
欲張りな体型だな。

「相変わらずの改造制服だな」

「これは〴〵白ロリ風アレンジって言うて〴〵」

「〴〵どうでもいい」

二人でそう言うとなんか理子は膨れて、
「いい加減ロリータの種類ぐらい覚えようよ」

とか言ってるが絶対に嫌だ！！

「それより理子、こっち向け。いいか？ここでの事はアリアには秘密だぞ」

「うー！らじゃー！」

頭の上にウサギみたいに手をつけ、敬礼の真似事をする理子に俺は紙袋を渡した。

「これが報酬だ」

これは理子限定の報酬だ。俺とキンジで秋葉原行って買ったな・・・畜生・・・情報のためとはいえめちゃくちゃ恥ずかしかったぞ。

「うわああああ！『しろくろっ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だあああ！！」

理子に渡した報酬というのはゲームだ。R-15指定のいわゆるギヤルゲーである。

実は理子はオタクなのだ。ゴスロリとかが大好きなのだが、ゲームシヨップで店員に中学生と間違われて買えなかったんだと。学生証をみせればよかっただろうに・・・

「あ・・・これとこれはいらない。理子はこっいつの嫌いな」

えーと、続編の奴だな。2とか3って言う。

「なんでだよ？それほかのと似たような奴だろ？」

まあ4000円近くのゲームを3本買った金欠のキンジには当然の疑問だろう。

「違う！2とか3なんて蔑称。個々の作品に対する侮辱」

「よくわからんがまあいい。それ以外はくれてやる。その代わり・・・」

キンジの言いたい事を先読みしたのか理子は

「アリアの情報でしょ？」

さすが探偵科のAランク武偵。

コイツはこんなだがネット中毒で覗き、盗撮聴、ハッキングなどあらゆる情報収集能力に長けている。

でも依頼の度にあんなゲームを買わなきゃならんのは困り者である。

「ねえねえ、2人はアリアの尻に敷かれてるの？」

彼女なんだからプロフィールぐらい自分で聞けばいいのに」

まあ聞いた所で『武偵なら自分で調べなさい』と返ってくるだけだな。

「彼女じゃねえよ」

「えー？アリアは2人と付き合ってるって噂だよ？」

ファンクラブの連中が殺すって息巻いてたんだよ？がおー」

まじでか！てかファンクラブがあるのか・・・

「角を作らなくていい」

俺はともかくキンジは仕方ないな。

あれは見方によっちゃ抱きついてる様に見えるからな

「ねえねえどこまでしたの？」

「どこまでつて？」

「えっちいこと」

「「するかバカ！！」」

2人がハモる。全力で否定するぞそれは。

「嘘つけえ健全な若い男女の癖にい！！」

そんな顔で言う事か・・・

「お前はいつもそっち方向に話を飛躍させる・・・悪い癖だぞ」

「ちえ」

「それよりアリアの情報だ。」

「コー君は知ってると思うけどSランク。

Sランクは2年じゃ片手で数える位しかないんだよ」

レキもその1人だ。よくよく考えれば今日の模擬戦ではSランクと張り合ってたのか・・・ゾツとするぜ。

「それに理子よりちっこいくせに徒手格闘も上手くてね。

流派はボクシングから柔道まで何でもありの・・・

え〜とバーリ・・・バーリー・・・」

「バーリ・テウードか？」

「そうそれ。イギリスでは縮めて格闘^{バリツ}技って呼ぶんだって」

「拳銃とナイフはもう天才の域。どっちも二刀流なの。両利きなんだよ」

確かにあいつは両方で撃ってたしな。

「それは知ってる」

「じゃあ2つ名は？」

アリアには2つ名まであるのか！？

優秀な武偵には自然とつくものだからな。

まあ地域限定の2つ名なら俺も持つてるがな・・・

理子はニヤリと笑い

「^{カドラ}双剣双銃のアリア」

武偵用語で2つの武器を使う事をダブルという。

つまりは4つの武器を使うのだ。

鳳凰モードなら俺もカドラだな

「笑っちゃうよね・・・カドラだってさ」

笑い所が分かんのだが・・・

「そっいや、アリアの実績はどうなんだ？」

「あ、うん。アリアは14歳から武偵としてヨーロッパで活躍して
いて・・・」

「犯人を1度も逃がした事が無い。」

「本当か？」

やっぱりすごいんだな・・・

「狙った相手を全員捕まえてる。しかもたった1度の強襲で」

「なんだって？」

俺とキンジは絶句する。

普通犯人逮捕するときは何度か強襲するものだ。
それを1度きりで・・・

「ほかには・・・？」

「うーんと、アリアはお父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「てことはクォーターか」

日本人離れしている訳だ。

「で、ミドルネームが『H』家。おばあちゃんはデイムの称号を授かっているんだよ。」

アリアは貴族なのかよ！？イギリス王家から女性に与えられる称号持ちだなんて・・・

「でもH家の人とはうまくいってないみたいなんだよね・・・。
だから家の事を言いたがらないんだよ。まあ理子は知っちゃってる

けどねえ・・・」

H家か・・・分かんないな。

外国の有名な自体あんま知らないし・・・

「教えて！ゲームやったる！！」

「理子は親の七光りとかそういうのは大嫌いなんだよね。
イギリスのサイトでググれば目星ぐらいつくんじゃない？」

くそ・・・コイツにこれ以上聞いても無駄そうだ・・・

「それじゃ！理子は帰ります！」

理子はそのまま去っていつてしまった・・・
それにしてもH家ってのはどこなんだ・・・？

第8弾 ブラックホールのレキ

理子と別れた後、俺は装備科に依頼をしに行った。

その後は帰っても暇なので、狙撃科スナイプの練習を見物している。

「すげえな」

全員がターゲットを的確に射抜いてる。
しかも、ターゲットの真ん中に。

その中でも、さらに凄腕なのは
狙撃科の麒麟児、レキ。

ほかの人よりも小さいのに一寸の狂いも無く当てている。
俺も一緒にクエストをしたことがあるが、

レキはほぼ無言状態で、依頼を淡々とこなしていた。
その無言、無表情のせいでついたあだ名が「ロボットレキ」。
外見的には美人なんだけどな・・・

「さて。帰りますか」

狙撃訓練も終わったので、帰ろうとすると
屋上にドラグノフを背負ったレキが来た。

「よお、レキ」

「・・・」

レキは相変わらず無口。うゝむ・・・話しづらいな。

「先ほど、狙撃科の訓練を見ていましたよね」
「バレてたか・・・さすがレキだな。」

「ああ。そういえば何で此处に？」

「風に命じられました」

「風？なんだそりゃ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「話が續かない！！こういう娘は苦手なのに・・・」

「そ、そういえばヘッドホンでいつも何聞いてんだ？」

「風の音です」

「風って？」

「私の頭の中に直接響いてくる。遙か故郷から」

「まったく分かん。結局はなんなんだろう・・・」

「そうだ、レキ腹へってないか？良かったら飯食いに行かないか？」
「何言ってるんの俺・・・」

「構いませんが」
「やっぱりむり・・・え？」

「え？何？」

「構いせんが」
意外な展開だ

それから5分、俺達は学園島の料理店に来ている。
幸い、人は少ない。いつもなら満席なのにな。ラッキー

「レキは何食う？」

「おまかせします」

おまかせしますたって・・・

レキにおまかせと言われたので店員を捕まえるが・・・

「あれ？風魔？」

「おお！これはこれは梗稀殿！！」

こいつは風魔 陽菜。

レザト
諜報科の1年でキンジのアミカだ。

確か有名な忍者の末裔と聞いたことがある。

「風魔はここでバイトを？」

「うむ。拙者、ここで修行をば」

ちなみに修行というのは大抵バイトの事である。

「師匠はお元気ですか？」

「まあ元気だよ」

風魔はキンジの事を師匠と呼んでいる。

中学時代、ヒステリアモードのキンジにあっさりやられ、それ以来師匠と呼び慕っている。

俺にもアミカがいるんだけど・・・

「あ！それより注文！俺はあんかけ焼きそばでレキにはおすすめの物を頼む」

「むむ？あれでござるか・・・」

風魔はそのまま行ってしまった・・・

あれってなんだよ！！俺の経験上、ろくな事ではないはず・・・

「おまたせしてござる！」

なっ・・・！何だこれは！！！！

レキの前に置かれたのは壺に入ったラーメン。

「これが当店おすすめメニュー『超壺麵』でござる・・・」

はあ！？なんだこりゃ！？こんな人間が食えるか！！

しかもメニューを見るとなんと5000円！？

ただし完食できれば無料。

やばいぞ・・・俺はさっき装備科で結構金を使っちゃった！！
3000円しかねえ！！

「レキ！いくら持つてる！？」

「カードならありますが」

ダメだ！こんな店でカードなんて使える訳ねえ！！
引き出そうにも通帳は自室の中だ！！

「制限時間は30分！よい・・・スタート！！」

風魔が勢いよくストップウォッチをスタートさせやがった！！

俺は今あまり腹が減ってない。それを食うのは無理だ！！

俺はふっとレキの方を見る。

なんとレキが食べ始めてる！！

いくら訓練後とはいえ、女の子がこんな・・・

その心配は無用だった。レキはなんと5分で麺を食べ切ってしまった。
すげえ・・・。

しかも食ってからまた食うまでの間断ウェイトが無い。

ラーメンってこんな少ない動作で食えるもんだったのか・・・
10分たつ頃には、麺と具は全て無くなっていた。

「なっ・・・なんで・・・ござると・・・ッ？」

風魔が完全に驚いている。

俺も驚いている。

レキの腹はブラックホールか何かなのかな？

レキはそのままスープを飲み始める。間断なしで、

おいおい・・・大丈夫か？いきなり死んだりしないよな？
無理すんなよ・・・

そんな心配を他所にレキは完食してしまう。

「なっ・・・これは・・・悪い夢でござる・・・」

まあ驚くのも無理はない

1年はまだこんな光景見慣れてないからな。

レキのおかげで食い逃げせずに済んだ。

帰り際、レキが

「今日はありがとうございました」

「いや、どっちかというと俺が礼を言う方だろ」

「それではまた明日」

「じゃあな--」

俺は危機を脱したと安堵のため息をつく。

レキはドラグノフを抱えそのまま女子寮へ向かっていった。
そっいえばレキのおかげでなんかすっきりしたな。

案外、いい奴なんだな。と改めて思った。

俺は寮に向かった・・・

第9弾 条件付きの降伏

俺が寮に帰ると、なにやら騒がしかった。

「強襲科に戻って、私から逃げた時の実力をもう1度見せなさい！」

「あ、あの時は偶然うまくいっただけで・・・俺は所詮Eランクで・・・」

「それは3学期の期末試験を受けなかったせいでしょう？
アンタ入学試験じゃSランクだった！」

入学試験ね・・・

ありや確か偶々ヒステリアモードだったキンジと
鳳凰モードだった俺が教官をあつさり倒してしまい、
その時キンジと戦ったが・・・負けたっけか。
さすがに4つの封じ手の1つじゃ勝てない。
その時に鳳凰モードがバレた。

結果として俺達はSランクだった。

まあ1年中間辺りからB落ちしたがな。

「つまり、あたしから逃げられたのも偶然じゃなかったってことよ
！！」

「と、とにかく今は・・・」
キンジが俺に気付く。

「梗稀！何してたのよ！？あんたにも聞く事はあるのよ！？」

「ああ・・・飯食いに行ってた」

あえてレキとは言わないでおく。

「ところで！梗稀・・・？今日のアレは何だったのかしら？」

ヤバッ！鳳凰モードの事を言っただけやがる！！

ここは適当にはぐらかしておこう。

「えーっと・・・何の事がさっぱり分からないなあ」

キンジが冷たい目で見てくる。おいやめろ！そんな目で俺を見るな！！

「嘘ね。あんたもBって言われてるけどSランクだったわよね？
てことは何かしらの能力があるって事よ！！」

鋭いな。

ま、鳳凰モードだけならいいか

「あれは俺の家系の特別遺伝の能力だ。

『朱雀』の力を上げ、全体的なステータスも上がる。

特にあがるのが跳躍力だ。理解できたか？」

「ふーん・・・それであんな所まで飛べた訳ね。理解できたわ。
それじゃ、キンジ。梗稀も教えたんだからあんたも教えなさい」

「な！？梗稀と一緒にするな！と、とにかく今は無理だ！」

キンジよ・・・自爆行為だぞ、それは

「今は？それじゃあ何か条件でもあるの？言ってみなさい。

協力するから」

アリアはヒステリアモードのトリガーを知らないからこんな事言えるんだよな。

ヒステリアモードにしたいなら、

キンジを性的興奮させる必要があるからな。

まあそんな事をアリアが出来る訳もない。

キンジも赤面してるぞ。

アリアの顔がキンジへ迫る。

ヒステリアモードになったなら、間違いなく

アリアに言われるがまま強襲科に戻るだろう。

「キンジ、諦めろ」

キンジはしょうがないなという顔で俺を見ると

「1回だけだ」

「1回？」

条件付きの降伏。

だがいい機会だ・・・あの頃のキンジがまた強襲科に・・・

「戻ってやるよ。強襲科に、但し組むのは1回だけだ。

戻って最初に起きた事件と一緒に解決する。それが条件だ」

キンジは続けて

「だから転科はしない。自由履修として授業を取る。それでいいな？」

アリアは少し考えてから

「いいわ。その1件でアンタ達の実力を見極める事にする」

アリアがついに妥協した。

仕方ない。キンジには悪いがコイツには本気を出してもらおう。
俺としては1発、大きな事件が起きてほしいものだ。

「どんな小さな事件でも一件だぞ」

「その代わり、どんな大きな事件でも一件よ」

「分かった」

「手抜きなんかしたら、風穴開けるから」

「ああ。全力でやってやる」

「おう！どんな事件でもドンと来い！」

1年半ぶりにキンジと組める・・・！
やっぱりどでかい事件に期待しよう。
だって折角キンジと組めるんだ。
強襲科らしく、暴れ回りたいしな！！

第10弾 強襲科生活へアサルトライフ 1日目

アサルト
強襲科。

武偵高で危ない場所の代名詞で、

先生も乱暴^{デキト}、銃撃戦は日常茶飯事の場所だ。

特にこの学科は、生徒の100人中97人しか卒業できないと言われている。

なお、100人無事卒業できた年もあったらしい。

命を落とす理由は様々で、訓練中、依頼中などがあげられる。無論、3人以上の事もある。

さて、余談はここまでにしよう。

強襲科にキンジが入ってきた。

おお、面白い位絡まれてるな・・・よし、俺も行くぞ。

「キンジ！お前は俺より早く死ねるぞ！」

「梗稀か！お前こそ早く死ね！」

「おう！キンジい！お前は絶対帰って来ると信じてたぞ！

さあ、俺よりも早く死ね！今すぐ死ね！」

「お前こそさっさと死ね！俺より早く！」

「キンジい！やっと死にに帰ってきたか！

大丈夫だ！お前みたいな間抜けはすぐに死ねる！」

武偵ってのはそういうもんだからな！」

「だったらお前、もうとっくに死んでるはずだろ！？」

この『死ね』というのはアサルトでの挨拶だ。

この学科では死ねは『おはよう』『こんばんは』と共通して使われるのだ。

みんなで死ね死ね言い合って、ごちゃごちゃになるがみんな嬉しそうだ。

アサルトは確かに死率が多い。

だが、この高校のどの学科より楽しい。

アサルトの訓練が終わり、俺達は話をしていた。

「キンジ！お前相変わらずの人気だなあ！！」

「だから嫌だったんだ」

キンジはため息をついている。

キンジ、お前はアサルトが一番似合ってる。

これはいわば運命とも言える。

「あつ、アリア」

俺が気付くとアリアが駆け寄ってくる。
俺達はそのまま歩き続ける。

「あんた、人気者なんだね、ちょっとビックリしたよ」

「こんな奴らに好かれたくない」

「キンジ、その言葉俺も該当してるよな」

「当然だ」

キンジの野郎、こういう時だけはつきり言いやがる・・・死ね。

「アンタって人付き合い悪いし、ちょっとネクラ？って感じもする
んだけどさ、

ここの皆はあんた達を一目置いてる感じがするのよね」

そりゃ、入試の事があるからだろ。

入試を受けた全員を倒した拳句、

キンジと戦い、結果負けた。

その時は鳳凰モードだったがな・・・

ヒステリアのキンジには勝てなかった。

切り札も隠してたしな。

「それに・・・アサルトでは誰も寄って来ないからね、
実力差がありすぎて誰も合わせられないのよ。」

だからあたしは『独奏曲^{アリア}』なんて言われている・・・」

確かにアリアは転校してからも浮いていた。
色々噂を聞いて、アリアを見た事があったが、
あいつは孤立していた。

圧倒的な実力差・・・ね・・・
痛いほどわかってるさ・・・そのせいで・・・

「アリアってオペラの独奏曲って意味があるの。
1人で歌うパート・・・1人ぼっち。
わたしはロンドンでもローマでもそうだった」

「それで俺達を奴隷にして三重奏でもするつもりか？」

俺が言うとアリアが小さく笑った。

「あんたおもしろいと言えるじゃない」

「なんか面白い事言ったか？」

「うん」

？意味が分からんし笑いのつばも分からん。

「キンジはアサルトに戻った方が生き生きしてる。昨日までのあなたは自分に嘘をついているみたいでくるしそだった。今の方が魅力的よ」

「そんなことは・・・ない」

キンジい、今度模擬戦やろうぜ・・・フルボッコにするから。

「俺達はゲーセンに寄っていく。お前は1人で帰れ！」

そっぴや理子に貰ったって言ってたな。

「バス停までは一緒ですよーだ」

アリア嬉しそっだな。

子供みたいだ。

まあそんな事言ったら風穴開けられるけど・・・

「ねえ、ゲーせんって何？」

「ゲームセンターの略だ。そんなことも分からないのか？」

「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。じゃああたしも行く。ご褒美よ」

「ご褒美じゃなくて罰ゲームの間違いだろ」

それは同感だ。

アリアは多分うるさいからな・・・っておい！！
俺を置いてくな！！

2人は早歩きを始める。

てかキンジが早歩きをし、それに着いて行く形でアリアが加速した。

「くだらん事でいちいち競争すんな！」

一応訓練後だぞ！！

どんだけ体力あんだよ！！まったく・・・

第11弾 白熱!! クレーンゲーム

訓練後にめちゃくちや走った・・・

ってか、走らされたんだけどな、

キンジとアリアが競争してそれについていった。

その距離なんと1キロ以上。

ものすごく気持ち悪い・・・。

1時間ぐらい訓練したんだぞ!!

どんだけ元気なんだよ・・・

俺はゲーセンに入ってたアリア達を追いかけた。
ん？アリアがクレーンゲームの前で止まっているぞ。

中に入っているのは・・・プツ

白いライオン？のぬいぐるみだ。

こんなのが欲しいのかな？

「かわいい・・・」

アリア・・・お前の反応の方が可愛いよ。

「やってみるか？」

俺が言つてやると

「できるの？」

「やり方教えようか？」

コクコクと頷くアリア。

なんかこのアリア、子供みたいだな。
簡単に教えてやると

アリアがクレーンゲームをやり始めた。
その間、俺は金を崩しに行った。

戻るとアリアは犬歯を剥き出しにし、
少し乱心してる様子だった。

ほほお・・・ひよっとして、取れないんだな？

「はあ・・・ちよっとやらしてみ」

俺はアリアを押しつけ、クレーンゲームをやる

・・・。

つあー！！無理！取れねえ！！

「お前いくら使ったんだよ・・・」

「ざつと5000円位かな・・・」

俺の財布はもうすっかり軽くなっちゃった・・・
今度Bランク依頼で稼ぐか・・・とほほ。

「今度は俺がやる」

そう言ったのはキンジだ。

キンジが100円を入れ、クレーンゲームを始める。
こうなったらキンジに託すしかない！！

落ちるなあああ！！！！

俺の願いが叶ったのか人形は上がっている。

「3匹も釣れてるわ!!」

すごっ!! キンジすごっ!!

こいつ、クレーンゲーム得意なのかな？
アリアと違って。

そのまま3匹の人形は落ちていった。

「やった!」

「よっしゃ!!」

「グッジョブ!!」

このクレーンゲームで金を使い切った俺たちは
ゲーセンから出た。

お望みの物を手に入れたアリアは

「かぁーわぁいいー」

とれた人形の名前は『レオポン』

マイナーなキャラクターだな。知らないし、

ぎゅううーとレオポンを抱きしめている。

こういう所だけ見ていれば、アリアも普通の女の子なんだよな・・・
何かがこいつにはある。
そんな事を感じていた。

俺の一族をめっちゃめっちゃにしたあいつの事もあるいは・・・

「キンジ！梗稀！」

俺がハツと我にかえる。

「この人形、あげるわ。2人の手柄だもんね。」ご褒美よ

畜生・・・こいつ可愛いな・・・。

俺たちはレオポンを携帯電話につけた。

3人のペアルックだが・・・

俺はともかくキンジとアリアがペアルックだなんて

白雪が見たら発狂しかねない・・・。

白雪が恐山の合宿で助かったぜ・・・。

第12弾 事件勃発（前書き）

今回はいつもより短いです。

ご了承くださいm（――）m

第12弾 事件勃発

朝、俺は一足早く武偵高に行き、朝練をしていた。

ちなみに、朝練というのは早朝練習ではなく、早朝訓練の略だ。
うゝむ・・・武偵高らしいな。

俺は腰から折りたたみ式の白虎刀を取り出す。

この前海蓮から届いたのだが、まだ使い慣れていない。
技も1つしか無いしな。

今度の技はどんなのにしようかな。

あのモードなら銃弾斬りもできるだろうが・・・
まだ見せる訳にはいかないな。

とりあえず

「白虎流 白時雨しろしぐれ!!」

この技は俺が即席で考えた技だ。

白薙の要領で斬撃の粒子を刀に乗せ、

更にそれをI字上に突き上げ、雨のように降らせるといふもの、

しかしこれは自損技、つまりは相打ち覚悟の技なのだ。

こんな大量に降らせたら自分も危ないしな。

その後、槍技を強化する訓練を1人でした。

勘違いするなよ、ぼっちってわけじゃねえ。

バイクにまたがり、一旦帰ろうとした時、
俺の携帯が鳴った。

メールか？誰からだろ・・・

俺はレオポンを引っ張り出し、携帯を見る。
アリアからだった。

差出人 アリア

宛先 バカキンジ バカ梗稀

件名 緊急事態

緊急事態よ！

今すぐC装備で女子寮に集合！

急いで！！

緊急事態だつて？何があつたんだ？

どうでも良いが宛先酷くね？

俺はアサルトでC装備に着替え、女子寮前に向かった。

女子寮に着くと、レキもいた。

話によれば、必要があれば援護してくれるという。

スナイプのSランク武偵がいるなら心強い。

「レキ。今回の事件の内容知ってるか？アリアは今立て込んでるみたいだからよ」

「今回の事件はバスジャックです。ジャックされたのは7：58に男子寮に停車したバスです」

なんだって・・・！？

てことはあのバスには不知火や武藤が乗ってるはずじゃないか！！

しばらくしてキンジが来た。

レキは先にバスを追いかけてへりに乗っていった。

「遅い！！早くしなさい！！」

アリアはキンジを乗せ、車を発進させる。

俺は、壊れてもいいバイクでアリアの車の後ろにつく。

アリアの指示はインカムで聴くことにした。

バスジャックか・・・

あれには武偵高の仲間が乗っているんだ・・・

武偵は仲間を見捨てねえ！！
全員無事、助け出してやるぜ！！！！！！

第13弾 バスジャック事件発生

「アリア、どうしてジャックされたって分かったんだ？」

俺はバイクに乗りながらアリアに聞く。

「奴は爆弾を仕掛けて遠隔操作する。その電波を今日キャッチしたのよ」

なるほど・・・しかし、なんか怪しい気がする。

「だがアリア、犯人は逮捕されたはずじゃあ・・・」

「あれは真犯人じゃないわ」

俺が言い終わるより早くアリアが返してきた。

真犯人じゃない？という事だ？

だが、模倣犯って事もあるな。

どちらにせよ悪質な野郎だ。

「とにかく！事件はもう起きてる！

被害者は武偵高の仲間よ。それ以上の説明はいらないでしょ？」

まったく・・・アリアの勇敢さにはたまに驚かされるね、

「とにかく！無事救助が優先って事だろ？

キンジ！残念だったな大事件だ！」

「これが約束の最初の事件になるのね」

キンジはがつくりとしながら

「大事件だな。俺はとことんついてない」

「約束は守りなさいよ。あんた等が実力を見せてくれるのを楽しみにしてるんだから」

実力ね・・・キンジが本気を出すのは無理だな。

アリアがトリガーを知ってたらやるのかな？

・・・やるわけないか、てかできねえな。

「アリア！俺は先に行く！作戦開始だ！！」

俺は作戦通り先行し、バイクを走らせる。

こりゃスピード違反で免停かもなあ・・・

しばらくするとバスが見えてきた。

バスは銃弾で撃たれたのか、窓ガラスが割れている。

そして横にはあの忌々しいモノを乗せたオープンカーが・・・

よっしゃ！いっちょやったるか！！

俺は青龍のPC365を取り出し、

「くらえ！！」

UZIを固定している部分を撃ち、さらにタイヤを撃った。オープンカーはグルグルと回り、壁に激突して大破した。

俺がバイクでバスの横に着くと

「梗稀！！」

そこには武藤がいた。

「よお武藤！災難だったな！！」

「まったくだぜ！お前こっちに移れるか？」

「もとよりそういう作戦なんぞな！」

ちなみにこの作戦で俺のバイクは乗り捨てなきゃいけない。
ああ、俺のバイク……。

俺が少し落ち込みながら車内に入ると
バスの中は騒ぎになっていた

「梗稀。この娘だ」

武藤が指した娘を見ると震える手で携帯を渡してきた。

「速度を落とすと爆発しやがります」

畜生あの野郎だ。

俺達を狙った武偵殺した。

やっぱり真犯人がいるのか！？

「アリア！やっぱり野郎だった。
遠隔操作されてやがる！爆弾は見つかったか？」

「バスの下にあるわ。しかもこのバスなんか簡単に吹き飛ばす量よ」

おいおい・・・冗談だろ!?

「アリア!後方から!」

「え?」

キンジが警告したと同時に、俺も後方を見た。

・・・!あの車さっきの・・・!

「皆伏せろ!!!」

伏せた時にUZIから銃弾が放たれる。

1発が俺の腕にある小型ワイヤー発射口に当たる

「ぐう・・・!」

いてえ!!こんなじゃ銃はつかえねえぞ!!

「梗稀!?大丈夫か!」

「俺は大丈夫だ・・・!アリアは・・・!?!」

その瞬間グラッとバスが揺れた。

なっなんだ!?

運転席を見ると運転手が伸びている。

くそつたれ！！避けられなかったのかよ！！

「武藤！！運転は頼んだぞ！！」

「人使いが荒いぜまったく・・・そんな事も言ってらんねえけどな」

武藤が運転席に座る。

「武藤そついえばお前次違反したら免停じゃね？」

「・・・」

ご愁傷様。

第14弾 無能な奴隷

バスはレインボーブリッジ直結のトンネルの中、こんな場所で爆発なんてしたら・・・！

最悪な事にこのバスは燃料漏れしているらしい。下手すりゃ都心でドカンだ。

「梗稀！どうした！？」

キンジがさっきの揺れについて聞いてくる。

「さっきの銃撃で運転手が気絶しやがった！！今は武藤が運転してる！」

「キンジ！梗稀！」

アリアの怒声に振り向くとまたしても後ろからオープンカーが突っ込んできた。

「この野郎っ！！」

俺はマグナム44を取り出し即座に2発、発砲した。リボルバーが回転し弾が発射される。

2発が銃の固定部分とタイヤに直撃する。
くそ！！一発当たった！

俺は銃弾で負傷した右手に包帯を適当に巻いたその瞬間、

「伏せなさい！！！」

アリアの声で再び振り返ると
さらにもう1台が迫ってくる。

俺は銃弾撃ちで応戦しようとするが
右手が激痛で動かない。

くそ！！こんな時に！！

銃弾が発射される瞬間、
アリアがキンジにタックルをする。

パン！！
パン！！

2つの銃声が交差すると鮮血が飛び散った。

アリアはそのまま倒れた。

「・・・！アリア！！！」

倒れたアリアを支えるとアリアから血が流れていた。
銃撃は止んだがアリアの手当てが必要だ！！

レインボーブリッジ直結のトンネルを抜け、レインボーブリッジに
出る。

これは本格的にやばいぞ・・・！！

俺が諦めかけている時、ヘリが並行して飛んでいる。
あれは・・・！レキ！！

『私は一発の銃弾』

レキのお決まりの台詞が、インカム越しに聞こえてくる。

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない』

『ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

パン！！！！

レキのドラグノフ狙撃銃から銃弾が放たれる。

それは一寸の狂いもなく、爆弾の固定部品に直撃し
火花をあげ、ガードレールを飛び越え海に落ちる。

海中に落ちた爆弾は巨大な水飛沫をあげた。

俺は海水を雨の様に浴びながら、

駆け寄ってきたキンジにアリアを渡す。

俺にはアリアを守れなかったという後悔の気持ちしかなかった・・・

その後武偵病院に向かい、
俺は一室で手当てを受けていた。

「よくもまあこんなにボロボロになったな」

俺の診察をしてくれているのは
衛生科2年Sランクの仙道香織。せんとつかおり

臙脂色の髪でボブカット。眼の色はアイスブルーだ。

「こんなの事件に巻き込まれりや当然だ」

俺が皮肉めいたことを言うと

「巻き込まれたんじゃないやなくて飛び込んだんだろ」

バシッと包帯を巻いた手を叩いてくる。

「痛っ！！鬼かてめえ！！」

なんて言い合ってから俺はアリアの病室に向かった・・・

第15話 失望

香織の治療を終え、アリアの病室へ向かった。

病室はロビーを挟んだ個室で、
言うなればVIP待遇の部屋だ。

俺がアリアの部屋に入ろうとしたときレキが出てきた。

ぶつかりそうになったので、すばやく身を引きつつ

「よお、お見舞いか？」

レキは無言でコクリと頷いた。

そしてそのまま歩いて行ってしまった。

・・・まっいつか。

俺はドアをノックした。

すると中から

「どうぞ」

アリアのアニメ声が聞こえてきた
俺がドアを開けると

「梗稀？」

「ああ、大丈夫か？」

「平気よ。見ての通りの軽傷」

すると開けていたドアから風が入ってきた。
ふわっとアリアの髪が靡いたときに見えてしまったが
アリアの額にはX状の傷が付いていた。

アリアがいつも見せていたチャームポイントに一生残るであろう傷
跡が・・・

「アリア、その・・・すまなかった・・・」
反射的に謝罪の言葉が出てしまった。

「いいのよ。『仲間を信じ、仲間を助けよ』、
私はそれに従っただけ」

俺は・・・あの時全力を出し切れなかった・・・

不注意で右手を撃たれ、そのせいでアリアは・・・

「もう用は済んだでしょ？さっさと出て行つて」

「アリア・・・」

俺は何も言えなかった。

否、言える事がなかった・・・。

「私が探していた人はあんた達じゃなかった」

その一言が深く俺の胸に突き刺さる・・・
俺にとつてもつとも重い言葉だった・・・。

第16弾 苦悩（前書き）

前回から随分遅れてしまいすみませんでした

第16弾 苦悩

次の日、利き手を負傷した俺は

槍と刀の訓練を断念し、軽いランをしてから自室（仮）に戻った。

ちなみに今日は休日なので学校は休みなのだが、
キンジが起きていた。

「おはよう」

「おう」

少し寝ぼけているのか目玉焼きに、
塩ではなく砂糖をかけている。

「なあキンジ。どうせ暇なんだしどうかブラブラしねえか？」
俺が提案すると、

「別に構わないぞ」

という訳で学園島の街を2人でブラブラしていると、
帰り際にアリアを発見した。

アリアは前髪の傷を隠すように降ろし、少し化粧・・・おめかしして美容院から出てきた。

なんだ？あんなお洒落して・・・デートか？

俺はキンジと信号を送るまでもなく、尾行を開始した。

着いていくとアリアは電車に乗り、着いたのは・・・
新宿警察署？何があるんだろう・・・？

「下っ手な尾行。尻尾がによるによる見えてるわよ？」

不意に掛けられた声に驚いてとっさに隠れたが、

「自分で探るのが武偵だろ？」

キンジと俺はすぐにアリアに話しかけた

「教えるかどうか迷ってた・・・でもここまで来たら着いてきちゃ
うでしょ？」

つてことは最初っから気づいてたなこれは・・・
さすがSランク武偵。

俺達が来たのは警察署の留置人面会室だ。
出てきた人を見た瞬間、俺は確信した。
この人はアリアの・・・

「まあ、アリア。その人達は彼氏さん？」

「ちっ、ちがうわよママ」

やっぱり母親だったか・・・てか、若いなあ・・・
ちよつと待て！！大分間違ってますよ！？
彼氏が2人つてことに疑問がないってドユコト！？

「じゃあ大切なお友達かしら？」

へえ、アリアもボーイフレンド作るお年頃になったんだ。
友達を作る事も下手だったアリアがねえ・・・ふふふ」

「違うの！こいつは遠山キンジ！こっちは軌条梗稀！
そついうのじゃないわ絶対に！！」

随分はつきり言いやがる・・・
なんか悲しい・・・

俺はアリアの母と目が合う

「梗稀さん、キンジさん始めまして。
私アリアの母親で 神崎かなえと申します。
娘がお世話になっているようで」

「「いやぁ・・・」」

戸惑う俺達をよそに
アリアは話を続ける

「ママ、時間がないから手短に話すけど、
こいつらは武偵殺しの3人目と4人目の被害者なの。
先週自転車に爆弾を仕掛けられて」

改めて考えると
バカみたいだな、俺等。

「まぁ・・・」

かなえさんは驚いたように固まった表情をしている

「さらにもうひとつ、奴は一昨日バスジャックを起こしてる。奴の動きがまた活発になってるのよ。

もつすぐ姿を現すはずよ。

だからまず、武偵殺しを捕まえる。

そうすればママの懲役845年から一気に742年まで減刑される。他の事件も最高裁までに全部なんとかするから」

つまりは終身刑か

「そしてママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を全員ここにぶちこんでやるわ」

「気持ちはいれしいけど・・・アリア。それより『パートナー』は見つかったの？」

「！そつそれは・・・」

「大きな敵戦う前に、あなたを理解してくれる人を見つけなきゃ」

「わたしなら1人でも・・・」

「いいえアリア。あなたが受け継いだ才能を発揮するには必要な事よ？」

曾叔父様や叔母様にも優秀なパートナーがいらっしゃったでしょう？」

「わかってる・・・いつまでもパートナーを作れないから欠陥品言われて・・・」

「人生はゆっくり歩みなさい。
早く走る子は転ぶものよ」

かなえさんはそういうとゆっくりと目を閉じた。

「神崎、時間だ」

管理官が時間を告げる

「ママ！待ってて！必ず公判までに犯人を全員捕まえるから」

「駄目よアリア！イ・ウーに挑むにはまだ早い」

イ・ウー？なんだ？なにか記憶に引つかかる・・・

「やめろ！ママに乱暴するな！！」

アリアは必死に叫ぶ。

「アリア！まずはパートナーを見つけないさい！

その額の傷はもう、あなた1人で対処しきれない危険に
踏み込んでる証拠よ！！」

アリアは激昂してアクリル板に飛び掛るがまったく壊れる気配はない

かなえさんは悲しそうにアリアを見ながら管理官に
無理矢理引きずられ部屋につれていかれた・・・

「訴えてやる！無実の人間をあんな扱いしていいはずがない！」

俺達は・・・黙ってアリアの後ろについていく。

アリアはかなえさんの冤罪を証明しようと
必死になっていた。

ただ大好きな母親を助けるために・・・

「・・・・・・・・」

アリアが立ち止まる。

アリアは肩を震わせ、顔を伏せていた

「アリア・・・」

「泣いてなんかない・・・泣いてなんか・・・」

怒り声のアリアはやはり泣いていた。

街を歩く人々は俺達を見てニヤニヤ笑ってる。

大方、喧嘩でもしたと思ってんだろぅがな。

失せるこの野郎。

「おい、アリア」

キンジがアリアの前にでて話しかける。

アリアは齒を食い縛り、

目からは涙を溢れさせている。

すると、まるで今まで我慢していたのが爆発したように泣き出した。

「うああああ！ママぁー・・・ママああああああ」

新宿の町にアリアの心がリンクしたように

雨が降り出した。

泣きじゃくるアリアに、

俺達は何もしてやれない・・・

否、何もできないんだ・・・

第17弾 『武偵殺し』開幕

週明け、俺は自室で怪我の具合を確かめていた。

幸い、深い傷ではなかった為現在は完治しつつある。

さすがSランクの衛生武偵《メディックDA》は対処が違う。

さて、と・・・

俺は防弾制服に袖を通し、

青龍の銃2丁とDE、

朱雀槍に白虎刀を装備して、弾倉をホルスターに押し込む。

部屋から出ると、キンジがリビングにいたので、

「よっ、俺今日休むわ」

「は？」

突然の発言に目を丸くする。

「いや、ちょっと出かけなくちゃいけなくてな」

「何かあったのか？」

「まあな」

まあ、私事と言えばそうなんだけどな。

実は先日、情報科の仲間、
インフォルマ
しのかわこう
篠河紅からある情報を貰った。

『神崎・H・アリアが帰国する。そのときに武偵殺しが神崎を狙ってくる』

との情報。

アリアの乗る便は事前に調査してもらい、
チケットも手に入れた。

あとは・・・アリアの護衛、って所かなあ・・・いらなと思うけど。

俺は羽田空港のカウンターで手続きを済ませ、
600便へと向かった。

手続きというのは拳銃、刀剣を持ち込む手続きである。
武偵と証明すればそのまま飛行機に乗れるのだ。

「なんだここ？」

そう思ってしまうくらい、600便の中は豪華だった。
普通の飛行機とは比べ物にならないVIP待遇の便。
さすが、リアル貴族の乗る飛行機は違う。

俺は適当に機内を見て周り、ついでにアリアの部屋も聞いておいた。

とりあえず不審な物は見当たらないし、大丈夫だろう。

離陸準備のアナウンスが入り、部屋に戻ろうとした時、声が聞こえてきた。

それも、聞き覚えのある怒鳴り声。

「・武偵だ！今すぐ離陸を中止しろ！」

「お、お客様？失礼ですがどういう・・・」

「説明している暇はない！！今すぐこの飛行機を止めるんだ！！」

フライトアテンダントが慌てて走り去るのを見届けてから、その怒鳴り声の主に声をかける。

「よおキンジ」

「梗稀！？お前どうして！？」

朝同様目を丸くする。

「お前もどうして・・・」

いきなり機体が揺れた。

どうやら離陸準備に入ったようだ。

そして、さっきのフライトアテンダントが両膝について

「あの・・・ダメでした。」

規則で管制官の命令でしか中止出来ないと・・・」

まあ、一武偵の意見が通る訳ないよな。

「で、キンジはどうする？」

「とりあえずアリアに会いに行く。部屋分かるか？」

「ああ」

俺達は急ぎ足でアリアの部屋へ向かった。

移動の途中、キンジと俺は情報交換をし、
2人が同じ目的で乗り込んだ事を知る。

部屋の前に着くと、キンジがノックもせずにドアを開けた。

「な、何！？キンジ！？梗稀まで！？何！？」

そりゃ、いない筈の人間が目の前にいたら驚くよな。

驚きながらも、アリアは

「断りもなく押しかけてくるなんて失礼よ！」

「お前も同じことしたろうに・・・」

俺が呆れたように言うと、アリアは例の如くすねた顔をした。

「とにかく離陸だ。座れよ」
キンジがアリアに指示を仰ぐ。

離陸が終わり、キンジがアリアの方に向くと

「武偵憲章2条、依頼人との約束は絶対に守れ」

「・・・？」

「俺は約束した。アサルトに戻って1件目の事件と一緒に解決してやる。」

武偵殺しはまだ解決してない」

「な、何よ今更！！あんた達のおかげでよく分かったの！
私は一生1人きりでやってくんだわ！！

パートナーになれる奴なんて世界の何処にも居ない！！

だから・・・」

ガガンガン

雷が鳴った。たぶん雷雲が近いのだろう・・・ってあれ？
アリアが小刻みに震えてるぞ？

「もしかして・・・お前雷が怖い・・・のか？」

俺が聞くとアリアは頬を引きつらせながらも

「こ、怖いわけ・・・ない・・・。」

バカみたい・・・！いいから！あんた達は今すぐ・・・」

ガガン

「ひっ！」

雷にビビッてアリアが耳を塞いでしゃがみこむ。
やっぱり怖いのか。

「怖いならベットに隠れて震えてろよ。
ちびつたりしたら一大事だぞ」

その発言はセクハラだろ・・・キンジ。

「う、うるさい！」

ピンポーン

「機長より、皆様に申し上げます。

当機はただいま、雷雲を迂回して飛行しています。

雷はしばらく続くと思われますが、安全運行に影響はございません」

アナウンスの途中で、アリアが真っ青になっていた。

ガガン

「ひゃああー！」

アリアが飛び上がってベットに隠れる。

「ははっ、アリアがこんなになってるの、初めて見たぜ」

「確かにな、ハハ」

2人で笑ってしまったその時、

パン！！ パアン！！！！

！！！！銃声！？

俺は即座に立ち上がった

「アリア！キンジ！先行するぞ！！」

俺は廊下に飛び出した。

案の定、他の乗客は混乱していた。
すると、アナウンスが聞こえてきた。

『アテンションプリーズ で やがります
当機はただいま ハイ ジャックされた で やがります』

この声・・・！やっぱり出やがったか！！

「武偵殺し・・・！」

『相手して ほしければ 1階の バーにくだ やがります』

1階のバー・・・か！！！！

アリア達も飛び出してきたので、
一緒に1階へ向かった。

俺達は飛び出してそこにいた人物に銃を向ける。

「お前は・・・」

そこにいたのはキンジと話していたアテンダント。しかし・・・

「気をつける で やがります」

「2人とも！！避ける！！！！」

スタンガンを向けられ、慌てて引き下がり、空き部屋に退避した。

「梗稀！大丈夫か！？」

「ああ。平気だ」

スタンガンが掠って、少し痺れが残るが問題ない。

「キンジ」

「ああ。やっぱり武偵殺しが出やがった」

「2人は知ってたの？」

「ああ、俺はちょっと情報を貰ってた」

「武偵殺しはバイクジャック、カージャックで事件を始めて、
実はシージャックである武偵を仕留めた。
そしてそれは、たぶん直接対決だった」

「根拠は？」

「その事件だけは例の電波が傍受されなかった・・・てことだろ？」

「その通り。そしてその必要がなかったんだ。奴がそこにいたから」

「俺の勘だが、奴は同じ事を繰り返してる。

バイクに変わってチャリ、車に変わってバス、そして舟の変わりに・
・・」

「飛行機、つてことか」

「でも、それがそのフライトだって確証は？」

「奴は自分の罪をかなえさんに着せた。これはお前への宣戦布告だ」

「すごいな・・・キンジ。

推理力がヤバイ。いつヒステリアモードになったんだ？」

「なめてくれるじゃない・・・目に物みせてやるわ」

「それじゃ、反撃開始といきますか！！」

武偵殺し・・・どこの誰だか知らねえが、
逮捕して、カタをつけてやるぜ！！

第18弾 『完全武人』VS『武偵殺し』

1度退避し、もう一度バーに行くときのアテンダントがいた。

今度は警戒し、銃を向ける。

「さっきみたいにはいかないぜ！『武偵殺し』――！」

俺が銃口をアテンダント…武偵殺しに近づける。

「今回も見事に引っかかってくれやりましたね…」

いつもの武偵殺しの話し方のまま

薄い顔のマスクを剥がし、続けて服をマントのように靡かせた。

マントが落ちるとそこにいたのは…

「なっ！？り、理子！？」

驚きながら聞くと

「ボンソワ、キンジ、梗稀、そして…オルメス」

アリアの眉が少し寄せられる。

『オルメス』？名前か？いや、でもH家って言うてたし…

「あんた…何者？」

アリアに聞かれると理子はサラッと答えた

「峰理子リュパン4世。理子はその曾孫」

リュパン…フランスの大怪盗アルセーヌ・リュパン。
その曾孫ってか？馬鹿げてるな。

「だからって、なんでこんな事する必要がある」

俺がいつもより真剣に聞くと

「それはね、理子が理子だから」

意味がわからん。
どうゆうことだ？

「屋敷の人間はみんな理子の事を名前で呼んでくれなかった。
お母様がつけてくれたこのかわいい名前を…」

「4世、4世、4世様あつて！！
どういつもこいつも使用人共まで・・・ひどいよね・・・」

「それが何？4世の何が悪いのよ！？」

理子はいつもの表情から一変し、

「悪いに決まってるんだろ！！私は数字か！？ただの遺伝子かよ！？

私は理子だ！！数字じゃない！！！」

なんだ？この異様なまでの執着は・・・？

「曾叔父様を超えなければ私は一生私じゃない・・・だからイ・ウーに入ってこの力を得た！！この力で私は？ぎ取るんだ！私を！！」

「理子。お前は間違ってる」

「何？」

俺が言っていると理子は鋭い視線を俺に向けた。

「お前は言った。『曾叔父様を超えなければ私は一生私じゃない』と」

「それがなんだ？」

「なぜそう思う！？俺達には分からない！」
俺が勢いに任せて一気に言うと

「何も知らないくせに…」

小声で理子が呟いた。

「そんな事お前らには関係ない！」

「だろうな。だが俺はお前を許せない。
神が許そうと仏が許そうと、

お前は武偵高の仲間、そしてアリアを傷つけた！！」

「梗稀・・・」

「だからあえて言つてやる！！理子・・・いや・・・」
俺が長い瞬きを終える。

久々の禁じ手だ。

「4世！！」

「なんだと・・・？貴様今なんて・・・」

「4世つて言つたんだよ！！峰理子リユパン4世！！」
俺は怒りに任せ叫ぶ。

「お前まで私を・・・畜生・・・絶対に許さない・・・」

俺が秘匿していた一族の双剣『双雷』を抜く。

「かかつてこいよ、4世！！」

俺が発動した禁じ手は『麒麟モード』

こいつは秘伝の禁術で、強い怒りでのみ発動する。
戦闘能力がずば抜けて上昇する、一族の秘術。

「お前だけは・・・許さない！！」

理子がワルサーを発砲するが俺はそれを事も無げに避ける。
そして素早く接近し、

「足元がお留守だぜ！！」

足払いをかけると、理子は簡単に倒れる。

「もうちょっと楽しませろよ！4世さんよお！！」

双剣による連撃を繰り出すが、

「お前の弱点は知ってるんだ!!」

理子は銃弾を投げた。

それは恐らく・・・

「しまっ・・・!!」

ドオオオオオオン!!

轟音が鳴り響く。あれは・・・

「武偵弾・・・!!」

それも達が悪い事に炸裂弾ときた。

「アハハッ!!どこに隠れたのかなあ？」

俺はとっさにバーの下に隠れたが負傷した・・・クソッ!またかよ!!

このままやり過ごしても埒が明かねえ・・・!

「クソったれ!!」

俺はバーの下から飛び出し、接近戦に持ち込もうとするが・・・

「アハッ!そこにいたんだあ!」

ワルサーを発砲すると俺の防弾制服のちょうど肺の部分に直撃した

「うつ・・・ぐう・・・」

俺はそのまま地面にうずくまる

「アハハ さよーなら梗稀」

畜生・・・またかよ・・・

「梗稀!!」

アリアがガバメントを構え、理子にアルカタを仕掛ける。

「梗稀!しつかりしろ!!」

俺はキンジに支えられ、なんとか意識を保っている。

眼前ではアリアが理子と戦っており、
キンジは理子が隙を見せる機会を伺っている。

「キン・・・ジ・・・」

「安心しろ。お前はここで休め」

クソ・・・また足手纏いかよ・・・

「お前に心配されるなあ・・・俺にもヤキが回ったな・・・」

「梗稀!まだ動くな!!」

「心配すんな、俺はまだ・・・やれる・・・」

武偵同士の近接戦において、

拳銃は一撃必殺の武器になり得ない。

至近距離で銃弾を当ててこそ、真の力が発揮される。
いわば打撃武器。

おそらく、理子とアリアの実力は互角だろう。

となれば勝敗を左右するのは銃の装弾数だ。

ワルサーの装弾数は16+1、対してアリアのガバメントは7+1、つまりはアリアが不利になる。だが・・・

アリアが理子の腕を両脇に挟むと

「キンジ！！梗稀！！」

やれやれ・・・倒れたばかりの人間に協力求めるか普通・・・だが・・・

キンジは首筋にバタフライナイフを、
俺は頭に拳銃を、

「そこまでだ！理子！！」

理子は完全に動けない状態。俺達の勝ちだが・・・

「はあ・・・奇遇よねアリア。理子とアリアは色んな所が似てる・・・
家系、キュートな姿もそして2つ名・・・」

「なっ！？」

「私も同じ名前を持つてるのよ？カドラの理子。でもね・・・アリアのカドラは本物じゃない！！」

理子の神がメデューサの様に動く。

そしてその先にはナイフがある。
そのナイフが勢いよくアリアへ振りかざされた

1 撃めは紙一重で避けたが2 撃目は・・・

「うあっ!？」

そしてバランスを崩したアリアの腹にワルサーが押し当てられ・・・

「アリア!!!」

パン!!!

マズルフラッシュと共に銃弾が放たれた。

アリアが・・・死ぬ・・・?

ドクン

俺は笑う理子に向けて

「アルセーヌリュパン4世」

冷静な口調で話す

「君は禁忌を破った。それにより、いますぐ粛清を与える」

俺の話し方と性格が変わった事に気がついたのか理子が

「貴様・・・何者だ？」

理子が驚愕の声色で聞く

「僕かい？僕は・・・」

「『^{ガーディアン}守護神』神藤 紅だ」

第18弾 『完全武人』VS『武偵殺し』（後書き）

久々の更新です^^

誰でしょうね？ こいつは（・・ノ）

真相は次回！！！！

第19弾 守護神

「ガーディアン
守護神？」

理子は眉間に皺を寄せる

「キンジ。アリアを連れて引きたまえ」

「お前、梗稀：なのか？」

キンジも驚愕の表情で聞いてくるが、

「後で説明しよう。それより今はアリアを助けてやってくれ」

「あ、ああ！」

「さて、リュパン4世」

理子は少し困惑した様子で、

「問いに答える。貴様何者だ」

「だから言つたろう？『守護神』神藤 紅」
理子は少し焦りながら

「二重人格だとも言うのか…？」

「そういうことでも構わないよ」
僕は双雷を拾い、構える。

「戦う気なら、手加減はしない」

「僕は先ほどの僕のように無様ではないよ」
そう言う

「ほざけ!!」

銃を構え突撃してきた

「粛清を開始する」

理子は先程の様に髪を動かし、構える。

「いつものコー君じゃないねえ・・・何処のだれかなあ!?!」
いつものような喋り方で聞いてきた

「さつき二重人格と言っていたが、君のほうがよくばど二重人格のようだよ

そして何度も言わせないでくれ」

銃で牽制をし、すぐさま銃を構え、

「朱雀36式銃術 紅蓮」

切り上げの一閃と共に白虎刀で

「白虎74式 虎応」

剣圧による衝撃波を繰り出す

理子は連撃をなんとか防いでいたが、次第に押され始め...

「ぐっ!!」

吹き飛ばされた。

「っ…危ないなあ…でも、ちょっとこれはまずいかな？」

「まだ肅清は終わってないよ。青龍34式 曲龍」

拳銃の居合い抜きをし、そして…

「…！銃弾曲げ《バレットカーブ》だと…！？」

ドオオオオオオオン

「さっきのお返しだ」

紅蓮の炎が巻き上がるとそこには理子の姿は無かった。

「逃げた…か…」

ドアが破壊されていたので気が付いたが、

恐らく爆発の寸前にドアを爆破させて逃げたらしい。

まったく…器用なんだかね…

さて、アリアは無事だろうか…

部屋に向かおうとしたその時、

「！！！！」

飛行機に向かってミサイルが飛んできて・・・

ドオオオオオオオオオオン！！！！

機体が大きく揺れた。どうやらエンジンが2機やられたようだ。

ただではやられないって訳か。

「急がなくては・・・」

僕は急ぎ足で部屋へ向かった。

部屋ではアリアが真っ赤な顔をしていた。
おや、事後だったかな？

表の彼なら激怒していたかもしれないな。

「梗稀。いや・・・神藤紅」

キンジが鋭い目つきでこちらを見る

「お前は何者だ」

どうやらHSS…ヒステリアモードになっているようだ。

「僕は彼の…そうだね、裏の人格とでも思ってくれ」

「裏の人格？」

「そうだ。僕は昔ある出来事があったね。そのときに僕が生まれたんだよ。」

言うなれば…」

「裏の人格がね。…ああ、そうそうそういえばさっきリユパン4世がミサイルを撃ってきて

4機ある内の2機のエンジンが爆撃されてしまった。はやく操縦しないと墜落してしまうよ？」

暢気に言うと

「おい。そういう事は早く言え」

胸ぐらつかんで言ってきたので

「す、すまない…以後気をつける」

「はあ…アリア、紅、とにかく操縦室へ向かう。いいな？」

「ああ」「……」

一体何をしたんだい？

もう少し考えて行動してくれたまえまったく…

そして3人は操縦室に向かった

第20話 活路（前書き）

テスト期間だけど・・・いいよね！！

第20話 活路

操縦室には機長と副操縦士が倒れていた。恐らく、睡眠薬か麻酔弾で眠らされているのだろう。

「アリア。操縦は任せたよ」

「私に全部任せないでよ。私だってセスナぐらいしか操縦した事ないんだから」

アリアが席に座り、操縦すると機体が平行に飛ぶ。片方のエンジンが両方破壊されなかったのは不幸中の幸いだ。

「ところでアリア」

「何？」

「僕はそろそろ表の彼に戻る。力になってくれるはずだ」
僕は目を閉じ・・・

俺は目を開ける。

「アリア、キンジ」
キンジは鋭い視線で

「梗稀か？」

確認をする。その鋭い声、ヒステリアモードになってるな。

「ああ、どうやら、『裏』が出たらしいな」

その証拠に、手の甲に軌条家の紋様が浮かび上がっている。

説明すると、俺は小さい頃、この『裏』を封印されている。という弾みで封印が解けたかは曖昧だが、

この手の紋様は封印の際につけた鬼道術の一種だそうだ

「とりあえず、この状況を羽田に伝えるべきじゃないか？」

キンジはすぐさま無線機で羽田の管制室に連絡をとり、現在の状況を伝えた。

俺はあいつが何故か持っていた衛星電話で連絡をとる。

電話の相手は・・・

「武藤か？俺だ」

「梗稀！？お前なんで・・・いや、そんなことはどうでもいい！！お前達ハイジャックされた飛行機にいるんじゃない・・・」

「ハイジャック犯は逃亡した。アリアたちなら無事だ」

それから今の現状、エンジンが破壊されている事を武藤に伝えた。

「そうか・・・一応その飛行機は最新技術の結晶。

2基でも飛べるはずだ。それよりも、だ。

キンジ！燃料計読めるか？」

「今540だ。435になった」

「盛大に燃料漏れしてやがる・・・」

「言いにくい事さらつと言つな・・・お前」

「止められる事はないんだろ？あとどれぐらい持つ」

「あと15分つて所だ」

くそ・・・手はないのか・・・
すると・・・

「こちら防衛省、航空管理局だ」

防衛省？こんな時に一体何を

「羽田の使用は許可できない。空港は現在自衛隊により閉鎖している」

「ふざけんな！！」

武藤が怒鳴る

「600便は燃料漏れしてる！！飛べてあと10分だ！！
羽田しかねえ！！」

「私に言っても無駄だ。これは防衛大臣の決定なのだ」
悪寒を感じ取り恐る恐る横を見ると

これはもう言葉が出ない。

F15イーグルが600便の横を並空している。

「防衛省さん？横にとっても防衛とは思えない戦闘機が飛んでいるのだが？」

「誘導機だ。誘導に従い海に出る。安全な着陸場所へ誘導する」

誘導すののに戦闘機なんて使うかよ・・・
キンジは通信を切る

「アリア。海に安全な着陸場所なんてない。
海に出たら撃墜するつもりだ」

「キンジ。とりあえずあの戦闘機を下がらせればいいんだよね？」

「？そうだが・・・できるのか？」

「まあ見てろって」

衛星電話を借り電話をかける

その人物は8コール目で出てきた

「はい、海蓮です」

「俺だ。情報は入ってるか？」

軌条家の情報網を信頼し先駆けて聞くと

「もちろんです」

よし！なんとかかなりそうだ

「それじゃ、あの目障りなF15を下がらせてくれ。出来るな？」

「軌条の名に掛けて必ず」

電話が切れるとF15がすぐに下がった。

「思い出したわ・・・軌条梗蒔、世界武偵連合の幹部でRランクの化物男。

世界じゃ1、2を争う武偵一家、よね？」

「昔の話だ。それより、武藤。滑走路にはどれ位必要だ」

「2450mってとこだな・・・ってお前まさか・・・！」

「大丈夫だ。学園島じゃない、浮島のほうだ」

「できるか？」

キンジは頷く

「武偵憲章1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』だ」

「信じるに決まっただろ！！」

「あんた達とここで死ぬなんてまっぴらよ！！」

そうだ。俺達はまだ死なねえぞ。

俺にはまだやることが山ほどあるんだ！！

諦めてたまるか！！

俺達は死なない。こんなところで死んでたまるか！！
活路は見えた・・・信賴してるぜ・・・相棒！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0886x/>

緋弾のアリア～誓いの一閃～

2011年11月29日21時54分発行